今を歩く 2013

札大の奨学生

アイヌ民族 それが誇り

同期3人「戦友です」

札幌市豊平区の札幌大学2号館の教室で22日夕方、21人の学生がスクリーンに見入っていた。

山菜の写真に、日本語とアイヌ語の説明文が併記されている。5月に予定している山菜採りツアーで使う資料作りを進めていた。

学生有志がアイヌ民族の文化や歴史を学び、普及を目指す「ウレシパ（育て合い）クラブ」。週2回の学習会で古老が話したアイヌ語の録音を資料にまとめたり、さまざまな機会に伝統舞踊などを一般向けに紹介したりしている。アイヌ民族の学生14人と、それ以外の学生7人が一緒になって活動している。

「画面のピントは合ってる？俺の目のピントが合ってないのか」。岡田勇樹さん(35)が場を和ませた。「本番では大勢の前で発表するんだよ」。山本りえさん(25)は、緊張気味に説明文を読み上げる後輩を励ます。議論の進行役を務めたのは、最年長の北嶋由紀さん(39)だ。

3人は文化学部の4年生。学業の傍ら、同クラブの活動を中心になって引っ張っている。札大が2010年に全国で初めて創設した、アイヌ民族対象の奨学金制度の第1期生である。

沈黙

3人とも、入学前にアイヌ民族であることを隠していた時期があった。

「おまえにもアイヌ民族の血が入っている。だけど、人に言っちゃだめだよ」。日高管内浦河町に住んでいた北嶋さんは小学校高学年のころ、祖母に告げられた。近くの祖母宅の仏間には、顔に入れ墨をした遺影が並んでいた。

当初はピンとこなかったが、アイヌ民族の友人がいじめられているのを見て、口外しないと決めた。学校では得意の水彩画や電子オルガンもわざと手を抜き、目立たないようにした。

苫小牧市で生まれ育った岡田さんは、高校時代に初めて母親からアイヌ民族だと知らされた。「アイヌ民族と言えば教科書に数※出てくるだけ。自分とは無関係の存在だと思っていた」。釧路市出身の山本さんは小学生のころ、アイヌ民族であることを理由にからかわれたことがある。

3人はアイヌ民族であることに目を背けながらも、高校を卒業して社会に出た後、アイヌ文化を理解したいと思うようになる。

北嶋さんの場合、転機は30歳を過ぎて訪れた。旭川市内の文化施設で見たアイヌ文様の刺しゅうに圧倒された。何かが心の中ではじけ、受験を決意した。

告白

10年3月下旬、入学直前に学内で開かれたウレシパクラブの合宿は、アイヌ民族とそれ以外の多数の学生との初の顔合わせになった。

奨学生は学生たち十数人を前に自己紹介した。北嶋さんはそれまで出自を親友以外に語ったことがなかったが、意を決して差別を受けた体験も語った。

「アイヌ民族と分かれば居合わせた人はその場で黙り込むか、ばかにするか、どちらかだった」。北嶋さんは今回もそう予想していたが、学生たちの反応は違った。哀れむわけでもさげすむわけでもない。「彼らは目をそらさずに自分たちを理解しようとしていた」

同大大学院2年の長谷仁美さん(24)と志田奈津紀さん(24)は当時のことをよく覚えていた。「ありのままに話してくれたことに感謝しました。一緒に勉強を頑張ろうと思った」と振り返る。

一方で、北嶋さんたちは入学後、長谷さんたちが自分たちよりも伝統文化に詳しいことに驚いた。「私が避けてきたアイヌ文化を熱心に学ぼうとしている。感動しました」。長谷さんたちも、懸命に勉強に打ち込む1期生の姿に刺激を受けたという。

奨学金制度創設の旗振り役となった文化学部の本田優子教授(55)は同時に、ウレシパクラブを支援してくれる企業を募る「ウレシパカンパニー制度」もつくった。

「民間企業がアイヌ文化に関わることで、社会にメッセージを与えたい」との思いもある。直談判で参加を呼び掛け、大手企業も含め40社が応じた。クラブ主催の宿泊ツアーで学生と交流している。

電通北海道の高堂理(おさむ)社長(58)は学生たちのひたむきな姿に心を打たれた一人。「奨学生がアイヌ文化との出合いや民族としての過去を率直に話しているのを聞くうちに涙が出た」。日本旅行北海道の落合周次社長(57)も「まずは文化を知ること。以前はアイヌ民族と接点がなかったが、今はファンです」と語る。こうした企業トップとの交流が、学生たちの自信にもなっている。

ただ、3人の1期生は民間企業に就職せず、自治体の学芸員などとしてアイヌ文化の伝承に携わっていきたいと思っている。「誤算だったなあ」。本田教授は苦笑いする。奨学金制度は民間への就職も目標の一つにしている。しかし、それだけ3人がアイヌ文化を好きになってくれた証拠でもある。

堂々

北嶋さんには夢がある。自分が縫った民族衣装を着て来年3月の卒業式に出席することだ。

「幼いころ、いじめられていたアイヌ民族の友人をかばえなかったことを悔やんでいます。今はアイヌ民族を隠さず、堂々と生きていることを伝えたい」。3人の成績は学内でトップクラス。北嶋さんは学部の総代も夢ではない。

山本さんは、今年11月に大学構内で開かれるアイヌ舞踊などの催しの準備を中心になって進める。作曲家の坂本龍一さんを招く予定だ。山本さんの祖父は著名なエカシ（長老）だった故・山本多助さん。「坂本さんがおじいちゃんを知っていると聞いたからです。おじいちゃんに感謝しないと」と目を輝かせる。

岡田さんは「決してアイヌ文化がほかの文化よりも優れているわけではない。いろんな文化があっていいと気づいた」と、学生生活を振り返る。今は大学構内で後輩らと一緒に、クマの霊を神の国に送る儀式「イオマンテ」などの練習に励んでいる。

1期生は当初6人が入学したが、経済的事情で3人が退学を余儀なくされた。残った北嶋さんらも授業料相当の奨学金77万円を支給されているが、授業に追われアルバイトをする余裕もなく、生活は綱渡りだ。それでも3人は静かに見守り合う。特別な言葉はない。

北嶋さんは、3人の関係を問われると、迷わず言った。

「一緒に走ってきた戦友です」

（報道センター　石井努）

4月中旬に開かれたウレシパクラブの学習会。（左から）アイヌ民族の奨学生、北嶋さん、山本さん、岡田さんらが意見を交わした＝札幌市豊平区の札幌大学（野沢俊介撮影）

札幌大学のアイヌ民族対象の奨学金制度　全国で初めての取り組みで、アイヌ民族の子弟の学生に年間で授業料相当額の77万円を支給し、事実上授業料を免除する。現在4年生3人、3年生4人、2年生4人、1年生3人が奨学金を受けている。奨学生は文化学部に所属し、アイヌ民族の専門知識を習得するためにウレシパ副専攻（アイヌ語、北方史）などを学ぶ。奨学生の必修活動であるウレシパクラブでは外部から講師を招き、アイヌ文化やアイヌ語の講習を受けることもある。企業に対しては、ウレシパクラブへの協力や支援を呼び掛けており、北洋銀行、ＪＲ北海道、アレフ（札幌）などが参加している。

（C）北海道新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。